

The Altered Mucosal Barrier Function in the Duodenum Plays a Role in the Pathogenesis of Functional Dyspepsia

小森, 圭司

<https://hdl.handle.net/2324/2556290>

出版情報：九州大学, 2019, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

(別紙様式2)

氏名	小森 圭司
論文名	The Altered Mucosal Barrier Function in the Duodenum Plays a Role in the Pathogenesis of Functional Dyspepsia
論文調査委員	主査 九州大学 教授 田口 智章 副査 九州大学 教授 須藤 信行 副査 九州大学 教授 笹栗 俊之

論文審査の結果の要旨

機能性ディスぺプシア (Functional Dyspepsia; FD) は、慢性的な上腹部愁訴を呈するものの器質的疾患を認めない疾患である。FDの病因は未だ解明されていない。本研究は、FDの病因と病態を消化管粘膜バリア機能の観点から解明することを目的とした。上部消化管内視鏡検査中に胃および十二指腸において粘膜バリア機能の評価指標となる粘膜電気的インピーダンス (MI) 値を測定し、FDと診断された患者 (FD群)、腹部症状があるがFDではない患者 (症候性対照群) そして腹部症状のない患者 (無症候性対照群) の3群間で比較検討した。FD群の十二指腸MIは、他2群と比較して有意に低値であった。FD群は症候性対照群と比較して、十二指腸粘膜のZonula occludens-1 (ZO-1) の発現が有意に低値であり、さらにはZO-1と十二指腸MIの間には有意な正の相関を認めた。また、FD群における十二指腸粘膜のInterleukin (IL) -18の発現は症候性対照群と比較して有意に高値であり十二指腸MIと逆相関を示した。一方、3群間において胃MIに有意差は認めなかった。結論として、FD患者では十二指腸粘膜バリア機能の低下を認め、粘膜バリア機能の評価がFD診断の一助となる可能性が示された。また、十二指腸粘膜バリア機能の変化にはIL-18の上昇及びZO-1発現低下が関与し、FDの病因・病態に重要な役割を果たす可能性が示唆された。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず、研究目的、方法、実験結果などについて説明を求め各調査医員により専門的な観点から論文内容およびこれに関する事項につき種々の質問を行ったが、いずれについても適切な回答を得た。

よって、調査委員合議の結果、試験は合格とした。